

ま え が き

本書は、大学生が中学校や高等学校で学んだ英語を更によく知り、理解できるようにする目的で著されたものである。よって、副題は「英語をよりよく理解するための 15 章」とした。実は、英語という言葉を知っているようで知らないのが日本人の英語学習者である。英語を使いこなすには英語とはどういう言語かを知っている必要がある。

一方で、本題の『英語学パースペクティヴ』に見るパースペクティヴ (perspective) とは日本語なら「透視図, 展望」となろう。これは英語という言葉の透視図を通して、その音声, 語構造, 文構造, 意味解釈, さらに英語にはどのような変種 (種類) があるかななどを解説したものである。その点では「英語学」と呼ばれる学問領域の概論書である。

本書は、先に『現代英語学要説』として出版された書物を大幅に改訂, 加筆して新しく生まれ変わらせたものであるが、旧版の目的は、大学で「英語学」や「英語学概論」と呼ばれるコースで教えるべき英語学のミニマム・エッセンシャルズについての解説を目指すというものであった。今回の改訂増補によって新しくなった本書は、まさしく、当時でいう英語学ミニマム・エッセンシャルズを基に、さらにその内容の充実を図り、本書の 15 章からなる英語のパースペクティヴが現代英語学におけるミニマム・エッセンシャルズを解説したものとなったはずである。

最近はともすれば、英語の学習, 習得とは会話を始めとする実用的な知識を学ぶことと思っている諸君が少なくない。しかし、言語の学

習とはその言語についてよりよく知ることが必要なのいうまでもない。その意味では、英語が話せるつもりでも何について話すのかという「内容」なくして会話は成立しない。言い換えれば、英語についての言語学的な発音分析や文法理解、また正しい意味解釈の知識が英語の実際のコミュニケーションに役立つといえる。

その意味で、「英語学」という聞き慣れない学問についての知識を学ぶというより、むしろ大学に入学された諸君が中高で学んできた英語について、発音を始めとして、文法のとらえ方や意味理解についてよりよく理解できるよう、本書には英語に関する知識が散りばめてある。

本書を精読し、英語というのはこのような言語であったのかと理解を深め、グローバルな社会の中で、英語の達人になれるよう、本書がその一助となれば、著者一同の望外の喜びである。

本書を旧版『現代英語学要説』の著者のお一人であった、今は亡き我々の恩師、石黒昭博同志社大学名誉教授に献げることにしたい。

著 者 一 同

目 次

まえがき	3
第 1 章 英語学への誘い	7
—英語について知っていますか—	
第 2 章 英語とはどんな言語か	13
第 3 章 英語学の分野	30
第 4 章 英語の発達 (1)	39
—揺籃期, 古代英語から中世英語—	
第 5 章 英語の発達 (2)	74
—近代英語から現代英語へ—	
第 6 章 音声学	94
第 7 章 音韻論	116
第 8 章 形態論	143
第 9 章 統語論 (1)	166
—伝統文法とアメリカ構造主義言語学—	
第 10 章 統語論 (2)	197
—生成文法—	
第 11 章 意味論	243

第 12 章 語用論	270
第 13 章 言語と認知	287
第 14 章 世界語としての英語の変種	313
第 15 章 日英語対照研究	352
あ と が き	392
索 引	395

第 1 章 英語学への誘い

—英語について知っていますか—

今やグローバル言語として、世界で最も多くの国で通用するといっても過言ではない言語、英語。昨今のインターネット、特に email の普及で、英語が理解できれば、世界の人たちともコミュニケーションが可能になるのは誰もが知りうるところである。日本でも最近は小学校から英語教育が導入され、みなさんの多くは中学校から英語を学び始めて、かなりの知識があると思っている方は少なくないと思う。では、本当に英語という言語についてどの程度知っているのか。まずはみなさんが英語という言語について、またそれが話されている英国について、どのくらいの知識があるのかをチェックすることから始めてみたい。

1. 英語が話されているのは英国、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアである。
2. 英語は世界で一番多くの母語話者によって話されている。
3. 英語は英国で先史時代から話されていた。
4. 英国（イギリス）という国は先史時代から存在していた。
5. 英語には元から単語の文法的性（男性、中性、女性）」は存在しなかった。
6. 英語の語順は主語、動詞、目的語（SVO）が基本であり、これは当初から変化していない。
7. 英語の形容詞は、昔から変化とさえ言え、比較級と最上級のみであった。

8. 英語の発音は、その歴史の中でほとんど変化していない。
9. 英語の語彙はドイツ語やフランス語のように 10 万語程度である。
10. 人称代名詞, he, she の複数形 they は、当然ながら元からの英語の単語である。
11. must の過去形は had to が使用されるが、実は must には過去形も存在する。
12. 不定冠詞 a は、母音で始まる単語には n が付加されて an になった。

上にあげた 12 の記述は、実はすべて間違っている。では、正解は何か。言語学では世界の言語を扱う為に、地球上ではどのくらいの言語が話されているのかを知っておく必要があり、これは言語を学ぶ者にとっての最低限の知識である。英語もその内の 1 言語だが、世界には 2013 年で、6,000 ～ 7,000 が数えられ、少なくとも 3,000 もの言語がこの地球上で母語として話されている。これは世界の独立国が約 200 ケ国であることからすると、とてつもなく大きな数字である。しかし、母語話者が今や 3 ～ 5 人という言語も少なくなく、それらは危機言語 (endangered language) と呼ばれ、21 世紀末には世界の言語数が 300 余りに減少すると言われている。そのような言語事情から見ると、英語は当然ながらメジャーな言語であることに変わりはなく、その話されている地域は、(1) に挙げた国の他、インド、東南アジア、香港を始めとして、アフリカ諸国でも多くの人たちによって話されている。さらに英語のもつ政治的、経済的な力関係からして、母語話者以外に極めて多くの人々によって話され、現代では global language と呼ばれている。しかし、(2) で見るように、世界中で話されている言語で母語話者人口が、一番多いのは英語かというそうではない。当然ながら、12 億の人口を有する中国で話されている中国語が一番多く、英語は母語話者の数でみると、4 億 3 千万の人たちによって話されていることから世界第 2 の言語なのである。因みに日本語は 1 億 2 千万

の話者人口を有する言語として、世界の言語の第9位に位置していることも忘れてはならない。

さて、(3, 4) について見ていこう。英国、イギリスという国はブリテン島に位置する国であり、ともすれば、スコットランドもウェールズも北アイルランドもすべて一括して英国と理解している人が多いのではないだろうか。英国の正式名は The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland (=UK) であり、日本語に置き換えると「大ブリテンと北アイルランド連合王国 (連合王国)」となる。もし、スコットランドもウェールズもイギリスと思っている人がいれば、これは間違いで、これらは連合王国の一地域なのである。Great Britain とは 1707 年以来、England, Scotland, Wales を総称する政治的な名称であり、我われが通常用いている英国とは England のみを指しているのである。そこで、United Kingdom の略称、UK が正式国名であり、UK では国全体を指す表現としては、England, English ではなく、Britain, British という表現が一般的に用いられている。たとえば、UK に影響を及ぼす機関は、British Rail, British Telecom, British Air, さらに British Passport に見るように公的には British を用い、English Rail, English Telecom などという表現は用いない。これは England が UK の一地域であるということの現れであり、これから以下のような表現が生まれるのである。

My father is English but my mother is Scottish. They are both British.

Longman Dictionary of Contemporary English

ここで英語 (English) というのは、England 地域で話されていることばであることが判ったが (Scotland には Scottish があり、Wales には Welsh がある)、ではこの English ということばはどこから来たのであろうか。さらに English と British の違いはどうして生じたのであろう。実は、現在の英国には英語を話す民族が先史時代から住んでいたのではなく、元はケルト民族の一派であるというブリトン族という

人種が住んでいた。彼らはブリトン語 (Breton) を話し、これは現在の英語とは全く異なる言語であった。このブリトン族から現在の Britain, British という語が使われることになり、英国が存在する島をブリテン島 (British Isles) と呼ぶのである。ではなぜ、英国は England, またそこで話されている言語を English と呼ぶようになったのだろう。これは、ヨーロッパ大陸の北に位置する Engles という民族がブリテン島に侵略し、彼らがブリテン島に永住することになった為に、このように呼ばれるようになったのである。即ち Engles が Angles に変化し、これがもととなり、Anglo Saxon という英語の元になった言語が使用されるようになった。ブリテン島には英国国民は先史時代以来住み着いていたのではなく、英語とはそこにもたらされたゲルマン系の言語であったのである。

この点からの記述が (5, 6, 7) である。ゲルマン系の言語であった英語には、現在のドイツ語に見られるような単語の文法的性 (grammatical gender) が存在していた。例えば古期英語では石 (stone=stān) は男性、国 (land=scip) は中性、息子 (son=sunu) は女性というように、男性、中性、女性という文法的性があった。さらに形容詞もこれら名詞を修飾する場合、たとえば、男性名詞を修飾する時は男性形を、女性名詞を修飾する時は女性形とするなど文法的性によってことごとく変化した。これらは動詞の変化が屈折=活用 (conjugation) と呼ばれたのに対し、名詞の変化も含め、曲折/語形変化 (declension) と呼ばれた。当然ながらこのような動詞は強変化、弱変化と呼ばれて複雑な活用体系を呈していた。さらに、語順に関して言えば、これも時代とともに変化したことを理解しておく必要がある。と言うのも、皆さんは中学校で英語の授業が始まると、5 文型 SV, SVC, SVO, SVOO, SVOC. という基本的には主語に動詞が続く、SV という語順を暗記させられた。これは、日本語が SOV であるのに対し、英語は主語の次に必ず動詞がくるという語順の相違について注意を喚起するためであった。そこで、英語の語順は古くから SVO であると思っ

り、SVO になったのは中期英語（1150）以降である。ついでながら、世界の言語をみると、SOV が一番多く、SVO は2番目に多い語順といえ、決して英語の語順 SVO が優勢ではないことも知るべきである。このような古期英語や中期英語の文法については、英語史の中で詳しく見ていくことにしたい。

次に発音の記述（8）について考えてみよう。「言語は常に変化している」というのは言語学の常識で、英語の発音もその例外ではない。例えば、name や five がなぜ [nejm], [fajv] という発音になったのだろうか。綴り字が a なら [name] でよいだろうし、i なら [five] でよいはずである。さらに book は o にもかかわらず、[bʊk] と [u] に変化している。これは英語の歴史の中で、200 年近くの時をかけて徐々に母音が変わったことによる。これを大母音推移（Great Vowel Shift）と呼ぶが、英語の発音は、その歴史の中で決して一定ではなかったのである。これについては英語史の発音変化の中で見ていくことにするが、英語の発音は、このように極めて複雑な変化を被った結果、現代英語の発音がある。これについては次章でのべる「英語の特徴」の中で、特に綴り字と発音の関係で考えていくことにしたい。

では、語彙に関する記述（9）について見てみよう。フランス語やドイツ語のように、ヨーロッパの言語としてはメジャーな言語はその語彙数は8万～10万程度といわれるが、英語のそれは50万語を数えている。これは現在の英語辞書の最高峰である全20巻からなる *The Oxford English Dictionary* にエントリーされている語彙数である。なぜ英語にこれほどの語彙が増加したかについては、後の英語史に詳細を譲るが、英語の語彙にはギリシャ語、ラテン語、フランス語、イタリア語などの他の言語からの多くの借用があり、その中には日本語のウォークマン（walkman）さえも入っているのである。

このように多くの語彙をもつ英語であるが、一般には言語の基本語彙とされる人称代名詞でさえも、（10）の they に関しては、歴史的な要因も加わり、they は Old Norse（北欧諸言語の祖先である古代ノルド語からの借用なのである。

次に (11) の *must* についての問題である。これは、中学校で英語を習い始めた時に、他の助動詞 (*can, may, will, shall*) などにはすべて過去形が存在するのに、*must* だけは *have to* の過去形である *had to* を用いるように教わった。この点については奇異に感じた諸君も多くいたのではないだろうか。しかし、これには正当な理由がある。元来 *must* は古期英語 *mōtan* の過去形である *mōste* が近代英語として発達したのである。即ち *must* はそれ自体が過去形であり、その為に、過去形は存在しないことになる。このように、英語の語彙はその歴史的な観点から分析すると、極めて多くの変化を遂げてきたといえる。

最後の不定冠詞 *an* についての (12) はどうだろう。中学校では元の形が *a* で、これが母音で始まる名詞の場合、*an apple, an egg* のように *an* になると教わらなかっただろうか。確かに教育的な観点からはこの方が覚えやすい。しかし、歴史的には *an* というのは *one* を意味し、これが先の形で、12 世紀半ばあたりから、子音で始まる名詞の場合に *n* が脱落して、*a* になったのである。言語変化には挿入 (*insertion*) と削除 (*deletion*) という 2 つの過程 (*process*) がある。当然ながら、もともと無い *n* を挿入するよりは、*an* のようなすでに存在した形から *n* を削除すると考える方が理に叶っている。というのも、もし *n* が挿入されたとしたならば、なぜ *n* 以外の音、たとえば、*m, t, s* などの可能性が排除されたのか。つまり「なぜ、*n* が挿入されたのか。」という説明は極めて難しくなるであろう。

以上、見てきたように、英語や英国について皆さんがどの程度知っているかと言えば、案外知らない事情が多いということが判っていただいたはずである。言語学とは、我われが話す言語の研究を行う学問であるが、英語学とは、以上、見てきたように、「英語」という言語に焦点をあて、英語の特徴を始め、音声、構造、意味など色々な観点から英語を分析、研究する学問である。次章では、皆さんがまだまだ知らないであろう英語の特徴についてさらに詳しく見ていくことにしよう。